

リンゴ

小林 幹夫

(人間社会学部人間環境学科)

Malus pumila Mill.

KOBAYASHI Mikio

1. 原生地と来歴

リンゴは、バラ科リンゴ属の落葉果樹である。リンゴ属植物には、真正リンゴ区、ズミ区、クロロメレス区、エリオロプス区、ドシニオプス区の5区があり、これまでに30種以上が知られている。ただ果樹園芸学上重要なのは前者までで、栽培品種、マルバカイドウ、エゾノコリンゴは真正リンゴ区に、ミツバカイドウはズミ区に属する。クロロメレス区の果樹はウイルス検定用に利用されている。

栽培品種の基本種*Malus pumila* Mill.の原生地は、カフカス地方と北部イラン地方、あるいはカフカス山脈の北斜面の広大な地域といわれている。この基本種に、*M. sylvestris* Mill. (ヨーロッパ中部から西部に原生)と*M. astracanica* Dum. (アジア西部のアストラハン地方からシベリア西南部に原生) が関与して、現在の栽培品種が形成されたとされている。

2. 栽培の起源は4000年前

リンゴ栽培の歴史は古く、いつごろからか明らかではないが、BC2000年ごろの湖棲民族(ヨーロッパ中部の原住民で、湖の水面に住宅をつくり生活していた民族、特にスイス地方に遺跡が多い。)時代には栽培されていたとされている。

スイスのド・カンドル(1806~1893)は、遺跡から出土した炭化リンゴから

推定すると、当時のリンゴには大果種と小果種とがあり、大果種のものでも果径3cm前後で、現在のクラブアップル（渋く、酸味の強い野生リンゴの総称）程度のものであったとしている。ギリシア時代のテオフラトス（BC372頃～BC288頃）は、野生種と栽培種の区別、接木繁殖法や栽培法を記している。リンゴはローマ人に愛好され、ローマ時代には品種の概念がさらに明確となり、30品種前後があったとされる。ローマ時代の博物誌家プリニウス（AD23頃～AD79頃）は、マルス (*Malus*、リンゴの属名) の名で、リンゴのほか、カンキツ、モモ、ナツメ、ザクロなどを記載していることから、当時リンゴを果実の総称と考えていたことが伺える。この傾向は16~17世紀まで続き、その頃、モモの学名をマルス・ペルシカ (*Malus persica*) と呼んでいたのは、この名残りである。現在のモモの学名は (*Prunus persica*) である。

3. アングロサクソンとリンゴ

リンゴがヨーロッパの中・北部に入ったのは、ローマ人の進入に伴っていたとされている。その品種改良や栽培技術の改善は、6~7世紀になってヨーロッパの中部以北でアングロサクソン民族によって行われた。トムソン著“Gardener’s Assistant” (1908) は、この間の事情を明らかにしており、アングロサクソンがリンゴを愛好したことは、ちょうどラテン系民族がヨーロッパブドウおよびオリーブを重要視したことと似ている。

17世紀以前にはまだリンゴの品種数は極めて少なく、それ以降になって熟期の早晚、果皮の色、果径の相違などの点での需要の多様化が進み、多数の品種が現われ、19世紀の中ごろには、イギリスは質・量ともにヨーロッパにおけるリンゴの一流産地となった。

4. クラブアップルとアップル

リンゴは生食用の果実として重視されただけなく、古くからリンゴ酒 (Cider) の原料としてブドウに次ぐ地位を占めていた。現代においても、醸造用として多数のクラブアップルが用いられている。クラブアップルとは分類学上の特定の種を指すのではなく、また、その定義についても種々の解釈があるが、一般には野生種と栽培種の間的大小で普通には約100g前後、

苦味と渋味のあるリンゴの総称で、主として加工用や料理用に使われている。昔は、アップルといえば一般に、現代で言うクラブアップルを指し、ヨーロッパ全土にわたり半野生の状態分布していた。いつごろからアップルとクラブアップルを区別するようになったのかは、判然としていない。おそらく、生食用の大果リンゴの品種が相当に普及し、栽培が進展した17世紀以後ではないかとされている。

5. ニュートンのリンゴの木

現在のリンゴは大果で甘くおいしいが、17世紀ごろのリンゴ果実の品質はどの程度であったのか。当時のリンゴを知るうえで、日本にもニュートンの家の裏庭に植えられていたリンゴの木の複製樹があるので、その果実品質をみてみたい。ニュートン(1642~1727)は、リンゴの落ちるのをみて「万有引力の法則」を発見したことで有名であるが、このリンゴは‘フラワー・オブ・ケント’という品種である。この品種は「ニュートンのリンゴの木」として接木で増殖され、世界各地に植えられている。調査によると、果実重122g程度と小さく、円~長円形、果皮は暗赤色で縞があり、甘味少なく酸味が強く、果肉が軟らかでボケやすく、さらに落果が多く、現在なら経済栽培品種になり得ない。余談であるが、‘フラワー・オブ・ケント’が落果しにくい品種であれば、ニュートンの「万有引力の法則」の発見は遅れていたかもしれない、という話もある。

6. アメリカでも主産地は冷涼気候

北米大陸にもリンゴ属植物は野生しているが、17世紀はじめヨーロッパからの移民が、各自持参したリンゴの苗木や種子を試した。しかし、ヨーロッパパドワの場合と同様に、東海岸の高温多雨の気候に合わず、ほとんどが失敗した。

これに対し、1625年には東北部のボストンで最初のリンゴ園が開かれ、ついで、1650年ごろからオンタリオ湖の南岸、ニューヨーク州のハドソン溪谷、南部ニューイングランドの丘陵斜面、バージニア州のシナンドア溪谷などの、比較的気温の低い地域において栽培が盛んになった。これらの4地域は、

数十年にわたって全米で消費するリンゴを生産するとともに、輸出量をもまかなった。はじめはブドウの場合と同じように、生食用よりも醸造用として生産された。

ついで、オハイオ、イリノイ、ミシガン州および大陸の北西部のオレゴン、ワシントン州で大規模な営利栽培が起き、現在においても全生産量の60～70%を、これらの地域で占めている。

7. 種まきジョニー

米国への移住当初、ヨーロッパから持ち込んだ品種の栽培に失敗した果樹園経営者らは、もっぱらタネから育てる実生繁殖による新品種の育成に努力した。そのなかでも、1975年にボストンで生まれたジョナサン(Jonathan)は移民の2代目で、ペンシルバニア州でりんご園を経営していたが、彼はゴールドラッシュに沸き立つ当時の風潮を嫌い、リンゴの種子と苗木を各地に配布して歩き、リンゴ栽培の普及に努めた。人々は彼を、Johnny apple seed「リンゴ種子のジョニー」または「種まきジョニー」と呼んで親しんだ。ジョニーとはジョナサンの愛称である。実際に、現在の北米のリンゴ産業の基盤となった品種は、北米で実生から生じたものが多く、たとえば、デリシャス、ゴールドン・デリシャス、紅玉などである。

さらに、19世紀の後半から大果でおいしい現代の品種の育成や栽培法の改善によって、北米のリンゴ産業は一段と飛躍し、20世紀には北西部のオレゴン州やワシントン州が量質の点で一大中心地となり、とりわけオレゴンリンゴの名声は世界市場を風靡した。

8. 日本でのリンゴ栽培の始まりと発展

日本には平安時代の頃に中国から「林檎」が渡来し、明治時代になるまで長く栽培された。

「林檎」は中国新疆地区の野生種(*Malus asiatica* Nakai)であり、当時、日本ではこのリンゴを「林檎(りんこう)」と呼び、現在のリンゴの呼び名はこれに由来する。このリンゴは、果径4cm前後と小さく食味の悪いことから、当時広く普及するまでには至らなかった。しかし、鎌倉時代中期に菓子として「林檎」

の文字が文献に見られることから、少しは普及していたと思われる。

現在の栽培リンゴ(西洋リンゴ)の系統は、文久年間(1861~1864)に福井藩主松平慶永が江戸屋敷に植栽したのが最初といわれているが、定かではない。西洋リンゴが導入される以前のリンゴ「林檎」は、西洋リンゴが導入されてからワリンゴまたはジリンゴと呼ばれたが、品質等の問題で次第に衰退し、現在はまったく栽培されていない。

西洋リンゴの本格導入は、明治4年開拓史が米国から75品種を導入したのが最初である。そのなかに‘国光’‘紅玉’が含まれていた。

日本の野生のリンゴ属植物は、エゾノコリンゴと、台木に用いるミツバカイドウ(別名:ズミ)だけであり、台木として広く用いられているマルバカイドウ(別名:セイシ)も中国から渡来したものである。

明治時代以降、米国原産品種の‘国光’(Ralls Janet)、『紅玉’(Jonathan)、『祝’(American Summer Pearmain)、デリシャス系(デリシャス スターキング・デリシャス等)、ゴールデン・デリシャス、カナダ産品種の‘旭’(McIntosh)などが、日本のリンゴ産業を維持してきた。一方、日本における組織的なリンゴの品種改良は、昭和3年に青森県農事試験場(当時)が、ついで昭和14年に農林省園芸試験場東北支場(当時)が開始した。現在、明治当初の導入品種を元に交配・育成した、『ふじ』、『つがる』、などが主要品種となっている。

9. 禁断の木の实

旧約聖書の創世記には、エデンの園で蛇に誘惑されたアダムとイブが、『禁断の木の实』を食べたことで楽園を追放されるくだりがある。この『禁断の木の实』はリンゴであったとするのが定説であり、創世記のこの話は、ヨーロッパから中近東、小アジアにかけてキリスト教社会とリンゴの関わりが、いかに古くから存在していたかを物語っている。

『禁断の木の实』がリンゴだったとすると、それはどのようなリンゴであったのか。ミケランジェロが16世紀のはじめにローマのシスティナ大聖堂の天井画に残した有名な「アダムとイブの原罪と楽園追放」には、イブが蛇から『禁断の木の实』を受け取る場面が描かれているが、手で隠されていてそれがどんな木の实かわからない。同時代に、ラファエロもこの場面を描いている

が、イブがつまんでいる実は小さなナツメのようなものである。しかし、ティントレットが16世紀の中期に描いた「アダムとイブ」では、イブがはっきりとテニスボール大のリンゴを手にしている。ティントレットは見慣れたリンゴをイメージしたのかもしれない。それ以前の14世紀の宗教画にはゴルフボール大に描かれているものもある。下って17世紀のベルサイユ宮殿の庭でリンゴを収穫している図になると、ようやく現在のリンゴ並みの大きさに描かれている。

引用文献

1. 小林 章(1990)文化と果物:89 - 94。養賢堂
2. 星川清親(1978)栽培植物の起源と伝播:216 - 217。二宮書店
3. 岸本 修ら(1992)日本のくだものと風土:79 - 87。古今書院
4. 今井敬潤(2006)くだもの・やさいの文化誌:94 - 101。文理閣
5. 梅谷猷二・梶浦一郎(1994)果物はどうして創られたか:31 - 37。筑摩書房
6. 塚谷裕一(1995)果物の文学誌:22 - 36。朝日新聞社
7. 間苧谷 徹(2005)果樹園芸博物誌:55 - 63。養賢堂
8. 間苧谷 徹ら(2000)果実の真実:88 - 199。化学工業日報社